補語を含む英文の型

半田一吉

I

補語は目的語よりも更に性質があいまいで，範囲や定義についても一様ではない。complement という語を最も広義に解すれば，動詞の意味の不完全さを補うために動詞の後に置かれて，動詞と共に文の predicate を構成する名詞，形容詞，及びその相当語，句，節のすべてを含む。従って目的語も副詞的修飾語もすべてこの中に入ることになる。最も狭義に解すれば，所謂 copula 或いは linking verb と称せられるもので，Curme の云うように，動詞本来の意味を伝えるものでなく，主語と真の predicate とを結ぶだけの機能を果すものの後に来る場合と，作為動詞の後で目的語と nexus 関係を表はす名詞，形容詞及びその相当語（句）だけを指すことになる。この間の段階を Fowler は M. E. U. の中で4段階に分けている。

(A)最も広義に解した場合で，最も論理的ではあるが，利用度は最も低い。

(B)直接目的は除外し，副詞的修飾語はすべて含む。

(C)動詞にとって不可欠でない副詞的修飾語を更に除外する。助動詞の後に来る原形動詞などは含む。

(D)最も狭義の場合で，一般に学校文法ではこの意味に用いられている。

ここでは一応狭い意味に限って論を進めることとする。

Jespersen や Poutsma のように complement と云はずに，predicative と云っている人もあり，Sonnenshine や Kruisinga 等も predicative noun (adjective) という語を用い，Onions は predicate noun (adjective) と云っている。

目的語との区別については，本紀要第8号の「目的語の研究」で述べたが，目的語が動詞をはさんで主語と対照的関係に立ち，主客を転倒して受動態の主語となり得るのに対して，補語は主語と等しいものを表わし，或いは目的語と nexus 関係に立つものであるから受動態の主語にはなり得ない。目的語の中にも受身の主語になり得ないものがあることは前回も述べた通りであるが，補語は目的語のようには，whom？ what？ に答えないという点でも区別出来る。be 動詞の場合は勿論後に来るのは補語であるが，be 以外の動詞でも後に補語が続く時は，何らかの形で be の意味を内包していると云える。即ち He remains poor. は He is poor. の状態が続いてあることであり，He becomes poor. は He is poor. の状態になることである。

次に副詞的要素との区別については考え方も千差万別である。He is in the garden. と He plays in the garden. とでは同じ in the garden でも，前者では不可欠の要素で he is だけでは文が成立しないのに対して，後者ではこれがあってもなくても he plays の意味に変りはない。故に前者では補語で後者では副詞的修飾語である。又 The sun shines bright. と The sun shines brightly. とでは，前者は The sun is bright. の意味を内包しているが，後者はこのように書き換えることは出来ない。故に前者は補語で後者は副詞的修飾語である。（新英文法辞典）

II

Jespersen は M. E. G. の中で，predicative of being と predicative of becoming の区別をし

て，夫々目的語に於る通常の目的語と結果の目的語に対応する関係にあると云っている。Poutsma は *A Grammar of Late Modern English* の中で，copula に次の三つの場合があるとしている。

(1)或るものが或る状態にあるか，或る性質を有することを示す。(indefinitely durative)

(2)或る状態に続いてあり，又は或る性質を持ち続けることを示す。(continuatively durative)

(3)或る状態に移り変り，又は或る性質を呈することを示す。(ingressively durative)

この三つは be, remain, become によって夫々代表される。Curme も同様にその *Syntax* の中で，(1)状態，(2)状態の継続，(3)状態への移行，を夫々示すとしている。Jespersen は次のような順位で，本来の意味をもつ動詞から主語と predicative とを連結するだけの役目をする copula へと推移することを述べている。

There he sat, a giant among dwarfs.
He came back a changed being altogether.
He married young and died poor.
The snow was falling thick.
The natives go naked.
The street ran parallel with the beach.
She stood godmother to his little boy.
He seemed anxious.
It proved true.
It was true.
The more fool he!

最初の段階は extraposition で，動詞はその意味を完全に保持し，文の終に after-thought として名詞が追加される形になってをり，時には apposition と区別し難い場合もある。次の段階は quasi-predicative で，Curme の云う predicate appositive がこれに当り，

He came home sick.　He died poor.

等の例を Curme はあげているが，これらは

He was sick when he came home.
He was poor when he died.

のように書き直すことが出来る。次の real predicative ではこのような書き直しは出来ない。real predicative は多かれ少なかれ動詞自体の意味を保有する段階から，empty link の機能に近ずく。その最も完成されたものが be であるが，be の場合でも主語と真の predicate とを結ぶ機能を果すだけでなく，具体的な意味が時には入ってくることを Curme は指摘している。

He is on the veranda.
　=He is sitting on the verande.

この場合でも目立たないので，be はやはり copula として感じられる。Jespersen は be 自身も元来独自の意味をもっていたのだが，次第にその意味を喪失するに至る段階をへて発達したと云っている。今日補語と共に用いられる動詞も，すべて完全動詞から補語をもつ段階に移行してきているのが見られる。

your fruit should *remain*. (John xv–16)
therefore your sin *remaineth* (John ix–41)
and now *remains* / That we find out the cause of this effect. (Hamlet II, ii, 100)
Please *remain* here till I return.
my joy might *ramain* in you. (John xv–11)
He *remained* unmarried.
He *remained* faithful.
I *remain* yours truly.
He *remained* a bachelor.

尚 be ついては Ⅲ で別に述べる。

最後は究極の段階で copula さえも形に現れない。これは多くの言語に見られる形であるが，もともと copula の場合には real nexus は主語と predicative の方にあって，be は無視してもよい要素にすぎない。be の果している実際の仕事は時制を示すことだけだから，時制が前後の関係から分っている時は be はなくてもすむ。quasi-predicative 以前の段階では重点は動詞の方にあると思われるが，copula では寧ろ重心は補語の方にかかっているので，Poutsma のように nominal predicate と云う人もある。

Copula になり得る動詞は，Curme によれば次の4クラスである。

(1)元来自動詞のもの。(He fell ill.)

(2)元来は他動詞だが，目的語が落ちて自動詞化したもの。(The room struck 〔one as〕 cold and cheerless.)

(3)再帰動詞の再帰目的が落ちたもの，

(He felt 〔himself〕 much depressed.)

(4)他動詞が目的語を保持しつつ，その具体的な意味を喪失して，become, turn out to be 等を意味する copula と感じられるもの。

(She will make him a good wife.)

次に行う分類では，このような歴史的課程は一応別問題として，現在現れている形を基準として分類する。

III

ここで補語を含む文の型を分類して夫々の例をあげるが，先ず主格補語と目的補語とに分け，それぞれ品詞等の別に従って区分し，主格補語の各項については，be 動詞の場合と be 以外の動詞の場合とに分けて，これを(a)(b) 2 項に分けることにする。最初に一覧表を掲げる。

〔A〕 主格補語

1. S+V+(pro)noun, gerund or quotation
2. S+V+adjective
3. S+V+participle
4. S+V+adj.+to-inf., phrase or clause
5. S+V+clause
6. S+V+prepositional phrase
7. S+V+adverb
8. There+V+S
9. S+V+to-infinitive
10. S+V+(to be)+noun, adj., etc.

〔B〕 目的補語

11. S+V+O+(pro)noun
12. S+V+O+adjective
13. S+V+O+participle
14. S+V+O+(to be)+noun, adj., etc.
15. S+V+O+adverb
16. S+V+O+to-infinitive
17. S+V+O+bare intinitive
18. S+V+O+prepositional phrase

尚引用文の出典の略号は，Bible では Matt=Matthew, John と Mark はそのまま，Shakespeare は Cœs.=Julius Cœsar, Ham.=Hamlet

〔A〕

1. S+V+(pro)noun, gerund or quotation

(a)it is I; (Matt, xiv–27)

Forty and six years was this temple in building. (John ii–20)

Neither a borrower nor a lender be; (Ham. I, iii, 75)

The question now is: will Apollo get to the moon in 1969? (Newsweek)

That was precisely what some Negro leaders hoped for. (Newsweek)

(b)Where is he that is born King of the Jews? (Matt. ii–2)

He only ... made one of them. (Cœs. V, v, 71)

Everything has come a full circle. (Newsweek)

(b)の場合は quasi-predicative も多い。(a)には次のような強調構文もある。

For it is not ye that speak ... (Matt. x–20)

次のような文はこの(b)に属すると考えられる。

It weighs two pounds.

これは it weighs だけでは意味は完結せず，

It is two pounds in weight.

と書き直すことが出来るからである。これに比して，

I walked three miles.

のような副詞的目的を含む文では，I walked の意味は three miles の有無によって影響されはしないから，three miles は副詞的修飾語であって補語ではない。

2. S+V+adjective

(a)Wide is the gate, and broad is the way, that leadeth to destruction. (Matt. vii–13)

but he was asleep. (Matt. viii–24)

Is it not like the king? (Ham. I, i, 58)

He was 58. (New York Times)

(b)he went away sorrowful. (Matt. xix–22)

Looks it not like the king? (Ham. I, i, 43)

The graves stood tenantless...
(Ham. I, i, 115)

形容詞は補語の中で最も数多く現れるもので，(b)には quasi-predicative も多い。

3. S+V+participle

(a)Blessed are the poor in spirit.
(Matt. v–3)

It is offended. (Ham. I, i, 49)

He is dead and gone; (Ham. IV,v, 29)

And the rumored composition of his government would be even more disturbing. (Newsweek)

(b)I get paid more (Newsweek)

And the question remained unsettled. (Newsweek)

They stand there getting all gray and sooty from engine smoke. (Newsweek)

(a)の場合は進行形か受動態になる。この両者は広い意味では補語と見ることも出来る。併し分詞が目的語や補語を伴う場合，be+～ing 又は be+past participle を動詞の変化と見る方が便利である。(b)の場合は当然補語となるし，blessed や interesting のように形容詞化したものもあり，He is married. などのように，be 動詞でこの型の文と感じられるものも多い。従って純粋に動作の進行や受身の意味を示すもの以外を，ここに一括してまとめたのである。have を用いた完了形は勿論こゝには含まれない。附帯状況を示す分詞も上例の中に含めている。

4. S+V+adj., etc.+to-inf., phrase or clause

(a)I am able to do this? (Matt. ix–28)

...whose shoes I am not worthy to bear. (Matt. iii–11)

That is enough to satisfy the senate. (Cœs. II, ii, 72)

Now I'm confident we will make it. (Newsweek)

I am proud and inspired and stimulated that there is a Ford in my future. (Newsweek)

(b)that I may rest assured / Whether yond troops are friend or enemy.
(Coes. V, iii, 17)

Clause の多くは be proud of, rest assured of 等の前置詞が略されたものであって，本来は phrase の一部をなす性質のものである。これらの to-infinitive や clause は，前の形容詞とは単なる副詞以上の密接な関係にある。尚形容詞の所に prepositional phrase が来て同様の形式をなしている次のような文もある。

I am at a loss to say why. (Newsweek)

We Americans are at liberty, if we are rich, to buy this car or that.
(Newsweek)

5. S+V+clause

thou shalt not be as the hypocrites are:
(Matt. vi–5)

It is because we have taken no bread.
(Matt. xvi–7)

The only difference between the police and the roughnecks is the police are the ones with hats on. (Newsweek)

Nyerere's big problem is that his own military forces are not as strong as Zanzibar's. (Newsweek)

最も頻度数の少い型で，(b)の実例は殆ど見当らない。that-clause の場合は(1)に含めた quotation の場合と非常に接近することもある。

6. S+V+prepositional phrase

(a)Son, be of good cheer; (Matt. ix–2)

In the beginning was the Word.
(John, i–1)

I am too much i' the sun.
(Ham. I, ii, 67)

What is between you? (Ham. I, iii, 98)

Small wonder the population is solidly for the Jeunesse. (Newsweek)

(b)because they continue with me now three days. (Matt. xv–32)

Except ye be converted, and become

as little children ... (Matt. xviii–3)

Get thee to a nunnery:

(Ham. III, i, 122)

形容詞句が補語になる場合で，形容詞，名詞に次いで頻度数が多い。（マタイ伝20章中に，形容詞補語 108，名詞補語 82，形容詞句 67，他はすべて20に満たない。）補語が文頭に置かれることも多い。形容詞の所で例にあげた like などは，形容詞であっても事実上は前置詞の働きをしているので，ここに入れてもよいものである。(a)に於ては be が純粋に copula で全く意味を失っている場合と，「居る」「ある」等の意味を明瞭に感じられる場合と，意味の強さに違いがあることは既に述べた通りであるが，上に並べた例では，Hamlet からの２例や John の例が後者に，他は前者に当る。併し次のような例で be の場合と see の場合とを比較すると，in secret は本来はやはり副詞句で，is も完全動詞的な働きをしていたと感じられる。

That thou appear not unto men to fast, but unto thy Father which is in secret: and thy Father, which seeth in secret, shall reward thee openly. (Matt. vi–18)

7. S+V+adverb

(a)Where is he that is born King of the Jews? (Matt. ii–2)

'Tis here! (Ham. I, i, 142)

So be it! (Ham. I, v, 114)

But Cassius is no more. (Cœs. V, iii, 60)

Vignettes of violence were everywhere. (Newsweek)

(b)and they continued there not many days. (John ii–12)

be 動詞以外の実例は少い。prove や seem のように間に to be が略されている場合は(10)で取扱う。副詞が補語になり得るかどうかには異論もある。これは be の用法とも関係してくるが，S–be–adv. の語順は形式として補語の体裁を備えているし，意味上からも不都合はないと思う。

8. There+V+S

(a)There was a man sent from God. (John i–6)

And the third day there was a marriage in Cana of Galilae. (John ii–1)

There's two or three of us have seen strange sights. (Cœs. I, iii, 137)

There is tears for his love; (Cœs. III, ii, 27)

There still were no hospital corpsmen on the beach. (Newsweek)

(b)but there standeth one among you ... (John i–26)

There cometh a woman of Samaria to draw water: (Matt. iv–7)

I fear there will a worse come in his place. (Cœs. III, ii, 113)

所謂 preparatory there を含む文であって，次の場合のように，there が「そこに」という意味をはっきり持つ場合は(7)に属するものとする。

and the mother of Jesus was there. (John ii–1)

Now Jacob's well was there. (John iv–6)

Lo, here is Christ; or lo, he is there; (Mark, viii–21)

here や where も preparatory there と同じ位置に来るが，これらは独自の意味をもっているので７に属する。Preparotory there はそれ自体の意味をもたないが，これなくしては文が成立し難い場合があるので，単なる副詞とは区別されねばならない。次の例のように場所を表はす there と並用されている場合もある。

because there was much water there: (John iii–23)

Now there was there nigh unto the mountains a great herd of swine feeding. (Mark v–11)

there was none other boat there; (John vi–22)

And there were set there six water pots of stone. (John ii–6)

最後の例は動詞が受動態になっているので(b)の例である。here と並用された次のような場合もあ

る。

There is a lad here; (John vi–9)

これを here で始まる Mark xiii–21 の例とギリシャ語の原典で比較してみると，

(Mark) ὧδε ὁ χριστός (here Christ)

(John) ἔστιν παιδάριον ὧδε (is boy here)

here の位置は英語と同じであるが，Mark では動詞を欠いている。ἔστιν は εἰμί (be) の3人称単数の直接法現在で，英語に移す時は多くは there を伴う。場所を示す there は ἐκεῖ に相当する。

ἴδε ὧδε ὁ χριστός ἴδε ἐκεῖ. (Mark xiii–21)

前に示した there が2種に用いられている場合は，εἰμί と ἐκεῖ が並用されている。

ἦν δὲ ἐκεῖ πρός τῷ ὄρει ἀγέλη χοίρων μεγάλη βοσκοένη. (was now there near the mountains a herd of pigs great feeding) (Mark v–11)

Bible では英語はギリシャ語の語順を忠実に追っているので，there や here の位置も原語に左右されていて，here is～ と there is～here との間に意味上明瞭な差違は認められない。ラテン語もギリシャ語とほゞ同じで，ドイツ語やフランス語は英語の preparatory there に相当するものをもっているが，「そこに」を表はす副詞と同一のものを用いているのは英語だけである。Mark v–11 についてみると，

(L) Erat autem ibi ...

(G) Und es war daselbst ...

(F) Il y avait là ...

英語に於ては古代から there is ... の構造が見られる。

OE þær bi ðdæg (there is day) (Ælfric)

ME A knight ther was, (Chaucer)

There is～ の場合，主語は is の後に来る名詞（相当語句）であって，He is there. では「彼はどこに居るか」が話題の中心であるのに対して，there is～ では「何が存在するか」が話題の中心である。それ故に there を主語と見る考え方もある。この場合は「存在しているのは～である。」という形になり，is の後に来るものが補語になる。その際の難点は，動詞の number が there によってではなく，後に来るものによって左右されることである。その点では，

It is the boys that did it,

などで，is の後に何が来ても動詞は変らないのと対照的である。従って there は単複同形で，There are boys という時は，there が複数になっていると云はねばならない。語順に重きを置く意味では悪くないし，本項冒頭にあげた Cœsar からの例などでは，there が主語として感じられているような形跡もある。併しここでは一般的な通念に従って，there を補語と見ておきたい。be を単独で用いて存在を表はす例も多く見られる。

Before Abraham was, I am. (John viii–58)

... with the glory which I had with thee before the world was. (John xvii–5)

It may be I shall raise you by and by/ On business to my brother Cassius. (Cœs. IV, iii, 245)

Wherefore, if God so clothe the grass of the field, which to day is, and tomorrow is cast into the oven ... (Matt. vi–30)

この中で，Abraham was だけは Revised Version では原語 (πρὶν Ἀβραάμ γενέσθαι) の通りに Abraham was born となっている。これらは現代流に書けば I existed, the world existed 等となる。

次のような位置に there is が置かれている例もある。

And many other things there be (R. V. では there are), which they have received to hold ... (Mark vii–4)

(10)の構文と組み合わせて次のような形をとる場合もある。

There seems (to be) no need to ...

受動態や進行形の動詞を先導する場合もある。

Now there was set a vessel full of vinegar: (John xix–29)

Now there was leaning on Jesus' bosom one of his disciples. (xiii–23)

Preparatory there に導かれる動詞は be が圧倒的に多く，例えばヨハネ伝中に be の例が 28 あ

るのに対して，他の動詞は7例（その他に進行形7例と受動態2例）にすぎない。

9. S+V+to infinitive

(a)this is Elias, which was for to come. (Matt. xi–14)

this visitation/Is but to whet thy almost blunted purpose. (Ham. III, iv, 111)

There seems no longer to be any doubt that the Communist purpose is to upset the 1962 Geneva pact under which ... (New York Times)

(b)He seem'd to find his way without his eyes; (Ham. II, i, 97)

They seemed not to notice it. (Hornby)

but, one by noe, the possibilities seemed to drop away. (Newsweek)

((a)の最初の例の for to については，市河博士「聖書の英語」p. 39 参照。R. V. では that is to come と改められている。)

(seem to be については特別扱いとして次頁にまとめてある。)

この型の infinitive が補語として成立するかどうかは，infinitive の品詞をどのように考えるかによって問題になってくる。To see is to believe. などでは，to see=to believe という関係が成立するが，He is to come. のような文では，he=to come と考えることは出来ない。前者のような場合に限って補語だとすることも出来ようが，後者の場合はどのような形式と考えるかが又問題になる。意味は広範囲にわたるが，一応皆補語としてここでは分類しておく。

10. S+V+(to be)+noun, adj., etc.

I would fain prove so. (Ham. II, ii, 131)

... which to him appear'd/To be a preparation 'gainst the Polack; (Ham. II, ii, 52)

No damage was done or so it seemed at the time. (Newsweek)

She turned out to be the one weak singer of the cast. (New York Times)

To be がある時は(9)と同じであり，to be が略された時は(1)(2)等と同じ型になるので，本項は不必要のようにも考えられるが，seem, appear, prove 等では，to be が略されていてもその意味が了解されているし，頻度数も多いので特別扱いして分類した。

尚主格補語の最後に，動詞が略されて S+C の形になっているものをまとめてみる。これは1—10の各項に含められるべきものの動詞が略されたものであるから，特のこのために1項を設けることはしない。

not a mouse stirring (Ham. I, i, 10)

To die: to sleep; no more; (Ham. III, i, 60)

Intermission lasts seventy minutes, and we without a reservation in the dining room, also without picnic lunch. Dining room full, sorry. (New York Times)

〔B〕

目的補語の場合は前回の「目的語の研究」の S−V−O−C 型と重複するので，前回あげたヨハネ伝以外の例を若干あげるにとゞめる。Jespersen は目的語と目的補語を併せて nexus–object と称している。

11. S+V+O+(pro)noun

In Parthia did I take thee prisoner; (Cœs. V, iii, 14)

I'll call thee Hamlet, / King, father, royal Dane: (Ham. I, iv, 44)

目的語と補語との間には，夫々 Thou wert prisoner. Thou art Hamlet ... の関係が含まれている。

I think it a pity that ...

のような仮目的を用いた変種もある。

12. S+V+O+adjective

I hold it fit that we shake hands and part: (Ham. I, v, 128)

Mad call I it. (Ham. II, ii, 93)

We Japanese like our newspapers impar-

tial. (Newsweek)

The limitation he imposed on his palette made his pictures as recognizable as a flag. (Newsweek)

13. S+V+participle

I hear him coming. (Ham. III, iv, 8)

Thus the Russians, in effect, found themselves supporting the warnings... (Newsweek)

he findeth it empty, swept and garnished. (Matt. xii-44)

Never make known what you have seen to-night. (Ham. I, v, 144)

make me acquainted with your cause of grief. (Cœs. II, i, 256)

14. S+V+O+(to be)+noun, adj., etc.

That drop of blood that's calm proclaims me bastard. (Ham. IV, v, 117)

I do not think it good. (Cœs. IV, iii, 195)

But Sen. Goldwater declared it unconstitutional. (Newsweek)

President Lyndon B. Johnson has proved himself a deft and tireless persuader with such varied opponents as Republican congressmen. (Newsweek)

To be が省略されると(11)(12)等と同型になる点では(10)の場合と同じである。次の文では there を to be there と解すれば本項の場合になるし，単なる副詞と解すれば S+V+O になる。

if your messenger find him not there... (Ham. IV, iii, 35)

15. S+V+O+adverb

It waves me forth again: (Ham. I, iv, 68)

この型の文に於る副詞が補語になり得るかどうかは疑問もある。併し take it away, bring him in, lay them aside 等，動作の行われた結果として目的語になっているものの置かれた位置や状態を副詞が表わしている限り，補語とみて差支ないと思う。

16. S+V+O+to infinitive

... who hath warned you to flee from the wrath to come? (Matt. iii-7)

They would not have you to stir forth today, (Cœs. II, ii, 38)

he commanded it to be given her. (Matt. xix-9)

I don't want any of that to die. (Newsweek)

次の(17)との区別は時代によって異る。(次項参照)

17. S+V+O+bare infinitive

But let your communication be, Yea, yea; Nay, nay; (Matt. v-37)

I saw Mark Antony offer him a crown. (Cœs. I, ii, 237)

Brief let me be. (Ham. I, v, 59)

The potential of the Congo would make any industrialized notion's mouth water. (Newsweek)

現代英語ではここに属するもので，Bible などでは to-infinitive になっているものも多い。

and I will make you to become fishers of men. (Mark i-17)

when they saw the dumb to speak, the maimed to be whole, the lame to walk and the blind to see. (Matt. xv-31)

マルコ伝中に現れるこの種の動詞を数えてみると次のようになっている。

	(to-inf)	(bare inf)
make	2	2
let	0	19
see	0	2

マルコ伝以外では，see や hear にも to-infinitive の用いられた例がある。

18. S+V+O+prepositional phrase or clause

For I am come to set a man at variance against his father. (Matt. x-35)

I do not set my life at a pin's fee; (Ham. I, iv, 65)

its members will find the camp almost exactly as it was when SS abandoned it in 1945. (Newsweek)